

## 広島文理科大・高等師範学校で学び被爆した中国からの留学生

No.	名前	所属	広島への留学経緯	被爆場所・状況	被爆前・その後
1	 張秀英	文理科大 生物学科	1918年12月8日生まれ。錦州省（遼寧省）出身。奉天女子師範を経て「満州国」留学生として41年奈良女子高師へ入り、44年9月卒業、文理科大へ進んだ。	45年8月6日米軍投下の原爆のため死去、26歳。爆心地一帯となる本川右岸、広島市塚本町（中区猫屋町）の長谷医院2階にあった「満州国留学生宿」女子寮に入っていた。長谷信夫医師は「満州国留日学生輔導協会」広島分館長を務めていた。	被爆前に関英吉と婚約し、留学生仲間にも祝ってもらったという。王大文は2004年に広島を再訪した際、「被爆後、寮の焼け跡に戻ったが、仲間の遺体は見つけれなかった。満州国留学生の寮は男と女に分かれていた」と中国新聞の取材に証言した。
2	関英吉	文理科大 地学科	「満州国」留学生。中国東北部の吉林省出身。42年高師文科に入学し、45年文理科大に進学。	原爆死。地学科教授の今村外治は「寮を出て登校の途中被爆したらしい／寮も焼失して遺品も求められず、ご遺族に連絡のすべもなくまことに心残り」と75年発行の「生死の火」で書き残している。	地学科地質学鉱物学専攻は43年に開設され、関は第3回入学生6人の1人だった。満州から帰国した長岡吾吾（55年に初代原爆資料館長）が地学科で授業嘱託をしていた。
3	董家麟	文理科大 物理学科	錦州省出身、42年に東京高師物理科、45年に文理科大へ入学した。	原爆死。塚本町（中区堺町）の「満州国留学生宿舎」で被爆したとみられる。宿舎は女子寮の南側筋に設けられていた。	「生死の火」の「留学生被爆死没者」には「董家麟」とあるが、「満州国留日学生録 康徳十年十月現在」（43年10月現在）には「東京高師 董家麟 錦州 二理」と明記されていた。
4	嘎昆雅図	高師	「満州国」留学生。高師特設予科に44年入学し、45年進級。	原爆死。「満州国留学生宿舎」で董とともに被爆したとみられる。	43年4月現在「外国学生生徒名簿 広島文理科大学・広島高等師範学校 満州国（三十四名）」の44年追記に名前があり、当初は己斐西本町や東千田町の民家に下宿。中国人研究者によると、名前から漢民族ではなく少数民族という。
5	張家驥	高師	内モンゴル（内モンゴル自治区）出身。44年2月、「蒙疆政権」から派遣された留学生32人の1人。東京・「善隣外事専門学校」特別予科を終えて入学。	原爆死。「満州国留学生宿舎」で被爆したとみられる。蒙古地域からの留学生を世話した東京の「善隣協会」職員が広島に向かい、寮の焼け跡で骨片を拾い集め、岩手県盛岡市にいた留学生仲間へ渡した。	広島市71年発行の「広島原爆戦災誌」第1巻は、中国大陸からの留学生で「被爆死亡」が唯一分かっているのは「内モンゴル出身の張家驥」と記述した。
6	戴璉	高師理科	河北省出身。43年東京高師理科に入学し、疎開命令で45年広島高師理科へ移った。「南方特別留学生」が入寮した大手町の興南寮に入った満州以外からの3人の1人。	原爆死。爆心地から約1.4km、東千田町の木造校舎にいた。倒壊した校舎で足を挟まれて脱出できなかったとみられる。	広島大庶務部国際主幹だった江上芳郎（後に鹿屋体育大教授）が83年、中国で健在の由明哲や王大文、董永増に手紙で問い合わせるなどして「生死の火」記載の満州からの留学生3人のほかに、嘎昆雅図、張家驥、戴璉の原爆死を「学内通信」で明らかにした。
7	 由明哲	文理科大 物理学科	錦州省出身。「満州国」首都だった新京（長春）の学校で広島から赴任した正行寺の住職と知り合い、45年文理科大に入学すると寺を訪ねていた。	東千田町の物理学実験室で被爆。教授らと広島県府中町の道隆寺へ避難して5日間過ごす。己斐の民家で留学生仲間と再会。地御前村（廿日市市）の正行寺に身を寄せ、看護を受けた。寺には初慶芝を伴い、王大文も滞在した。	45年12月東京文理科大へ転学。50年帰国し、「人民日報」11月11日付で「私が出くわした原子爆弾」の手記が載る。北京工業大で教えた。広島県議会日中友好議員連盟の招きで81年に広島を王大文と再訪し、被爆者健康手帳を取得。94年広島アジア競技大会では県が招待した。99年5月20日、膵臓（すいぞう）がんのため北京市内で死去、86歳。
8	董永増	高師理科	河北省出身。44年高師に入学し、45年からは万代橋東詰め近くの興南寮に入居した。	戴璉と授業を待っていた1階音楽教室で被爆し、脱出。インドネシアなどからの「南方特別留学生」らと焼け残った文理科大で過ごした。	横浜中華学校で教え、52年に王大文と帰国。山東省済南市の山東工業大副教授を務めた。85年6月、総評・原水禁被爆者訪中団長を務めた森滝市郎（被爆時は高師教授）と再会し、広島への招待が進んでいたが同年10月17日、心臓病のため死去、61歳。
9	 朱定裕	高師文科	21年12月5日生まれ。蘇州出身。汪兆銘政権から派遣されて43年来日。周恩来も学んだ東京・神保町の「東亜高等予備校」を経て東京高師入学。疎開命令から45年6月14日広島に着き、興南寮に入った。	高師木造1階の音楽教室で下敷きとなり、ガラス片が右額の骨まで食い込み血まみれに。南方特別留学生と逃げ、近くの広島赤十字病院で2晩過ごす。文理科大に移され寝ていた朱や、部屋の隅で炊き出しをしていた南方特別留学生の様子が、前任者の原爆死で留学生担当を引き継いだ文理科大教授が被爆4年後に著した手記に残る。	「中華民国留日学生同窓総会」の推薦から連合国軍総司令部（GHQ）で翻訳を手伝い、46年からは中華民国代表団で働く。日本軍が持ち帰った貴重な木版本の返還作業に当たり、日本人女性と結婚。「中華留日学生報」47年9月1日付に「二年来的悪夢」と原爆体験記を寄せていた。52年からは駐日中華民国大使館勤務。「広島原爆戦災誌」編さんに伴う調査や、埼玉県在住の90年には原爆資料館による被爆者証言ビデオの収録に応じた。2019年9月10日死去、97歳。
10	 初慶芝	文理科大 史学科	20年5月12日生まれ。吉林省出身。新京特別市立女子中を経て39年奈良女子高師へ留学し、43年9月卒業。同月、文理科大入学。大戦中に奈良女子高師からは5人が文理科大へ進んだ。	史学科の研究室で読書中に被爆し、ブラウスは血で染まった。負傷者らについて逃げた広島陸軍被服支廠（ししょう）で意識を失う。約1週間後、王大文らが迎えに来て己斐の長谷信夫医師宅、さらに「山本ヒロコ」（漢字は不明）宅へ運ばれたという。	46年9月23日文理科大史学科卒業の記録が残る。横浜中華学校や東京中華学校で教え、50年帰国してロシア語教師に。53年出産の子供が死去。子宮がん手術も受けた。63年長春に戻り吉林大で日本語翻訳に当たり、養女家族と暮らす。86年、広島県原水禁などの招きで広島市を訪れ、被爆者健康手帳を取得。95年平和記念式典に招かれた在外被爆者16人の1人として献花。健在かどうかは不明で、手帳は「廃止」になっている。
11	 王大文	高師理科	25年9月16日生まれ。奉天（瀋陽）出身。「満州国」最後の駐日大使となる伯父・王允卿の勧めで来日し、東京府立第五中（青山高）に転入。疎開を経て45年広島高師に入学した。	塚本町の「満州国留学生宿舎」から通っていた高師の教室で被爆。飛んできた破片で右あごを切り、倒れてきた壁から脱出。マレーシアからのアブドゥル・ラザクから南方特別留学生に続いて逃げた。寮の焼け跡に入り、8月9日、文理科大で寝ていた朱定裕を大八車で運ぶ。初慶芝を己斐の民家にも運んだ。	45年9月伯父がいた箱根へ。東京工業大で学びながら、横浜中華学校で教える。貧血がひどかったという。51年中華人民共和国教育部に帰国を願う手紙を送り、52年横浜を出航し、7日間かけて天津に。董永増も一緒だった。山東工学院で金属工学を教え、66～76年の文革中は「学問をもって働けなかった」。南京工学院で講師を務め85年に退職。2004年再訪し、中国人被爆者で初めて健康管理手当を申請し受給。手当送金は現在も継続。
12	金亨圭	高師文科	吉林省、朝鮮民族居住地である間島の出身。43年に高師文科へ入学した。	「広島原爆戦災誌」は「金という姓の朝鮮系満州人が、被爆直後、生き残っていた」と朱定裕の談話を載せている。	43年「外国学生生徒名簿」は「金亨圭」と記載。広島大教育学部が「原爆戦災誌」編さんに提供した「（昭和）18年—22年卒業生（広島高師）」には「亨圭」との手書きがあったが、韓国人研究者は「亨圭（ヒョンギョ）」が一般的だという。戦後の消息は不明。

広島大原爆死没者慰霊行事委員会「生死の火」1975年▼江上芳郎「中国留学生と原子爆弾被爆」広島大「学内通信」1983年6月20日・227号収録▼広島市公文書館所蔵「原爆戦災誌編さん資料」▼周一川「奈良女子高等師範学校における『満州国』留学生」神奈川大「人文学研究所報」2011年・45号▼稲富栄次郎「世紀の閃光」1949年▼加藤礼子「広島再訪の元中国人留学生」広島・長崎の証言の会「ヒロシマ・ナガサキの証言'86」第19号▼織本重義「モンゴル留学生とともに」善隣会「善隣協会史」1981年などや、2004年初慶芝、王大文への取材とあらためての調査を基に作成。顔写真は、1は周一川、9は原爆資料館の提供（敬称略）